

残存する方言音声の質的バリエーション

—— 典型から知識レベルの実相まで ——

大 橋 純 一

Qualitative Variants of Extant Dialect Speech Sounds: From Type to Actual Aspect of Knowledge Level

OHASHI, Junichi

Abstract

In research on speech sounds, one cannot expect to arrive at the desired pronunciation just after one trial since attempts to extract relevant sounds depend on utilization of associations such as riddles. Especially, in case of complex dialect speech sounds, pronunciation that differs from the one sought is, in fact, given as the answer and it is often the case that the relevant pronunciation is inductively observed at the end of a number of exchanges. From this, it can be understood that among sounds considered to be similarly extant, there are some natural and qualitatively different variants that coexist. However, in spite of this fact, past research had practically no interest in the correlation between differences in response status and extant qualitative variants. Based on the abovementioned details, this paper examines what qualitative variants can be extracted from among dialect speech sounds that are simply labeled as extant and how this is related to the currently extant meaning and the subsequent changes. To achieve this, the study targeted elderly speakers of the Akita dialect. First, three levels called A type, B intermediate, and C knowledge were set based on the response status at the time of the survey and by comparisons with them, attempts were made to gain an understanding of the actual conditions related to the three qualitatively different speech sound events. As a result, it was revealed that in all the three events, there were qualitative variants of the dialect speech sounds in accordance with the existing levels A-C. Further, although A and B can be considered as continuous changes, there were significant gaps in C and it was identified that these gaps arose due to the fact that speakers of C relied on knowledge fragments and imitated the pronunciation of old dialect speech sounds.

Key Words : dialect speech Sounds, qualitative variants, actual level, intermediate level, knowledge level

キーワード : 方言音声, 質的バリエーション, 典型レベル, 中間レベル, 知識レベル

はじめに

調査で方言使用の有無を調べようとした場合、たとえば語彙調査であれば、その語を「使う」か「使わない」かに加え、「聞いたことがある」、「昔は使っていた」、「知っているが使うことはない」といった諸段階を聞き、それらを区別して捉えることが一般的である。それにより、その方言が“現に今使われていること”を問題にし、残存の在りようを統一的な視点で見通そうとする。

それに引きかえ、音声調査では、上記と似た手順はとるものの、分析段階でそれらがどのような回答状況であったかを顧みることはあまりない。それは、ひとつには、音声調査が謎々などの連想から当該音を引き出そうとす

ること、よって一度で求める発音に辿り着くことは想定しておらず、発音違いや疑問調の回答が介在する（それらを浮動の発音と捉え、最終的に得られた実相を当人のそれとみとめる）のが基本と考えていることと関係する。このようなことから、同じく“残存”とみとめられるものの中にも、自ずと性質の異なるいくつかのバリエーションが併存することになる。たとえば、聞くまでもなく当人においてそうとしか発音できないといった意味での残存、いくつかのやりとりの末にその発音が誘導的に確認されるといった意味での残存、知ってはいるがあくまで共通語音声为主体であるといった意味での残存などである。

筆者の経験からすると、10年、20年前の調査では、

およそその土地の年配者であれば、上記でいう「そうとしか発音できない」話者であることが多かった。たとえば東北方言で /i/ と /e/ の発音を求めれば、どのようにしても中間音の [ɛ] にしか現れないという話者が大多数であった。しかし、近年の調査でそのような話者に巡り合うことはあまりない。実際には誘導や聞き返しを重ね、質問の意図が汲み取られたところで漸く問題の発音が回答されるといったことがほとんどである。^{注1} つまり、方言音声の残存の在りようはかねてより質的に多様であった。加えて最近では、上記のような知識レベルの残存がさらに多様に併存するのであり、観察者の立場として、そのことをまずは直視する必要がある。

本稿は、以上のような観点から、一口に“残存”と括られる方言音声の中に、どういった質的バリエーションが抽出されるかについて、ささやかながら探りを入れるものである。^{注2} 誘導や使い分けなど、いわゆる知識レベルに留まる話者の実相は、典型話者の実相と比べ、質的にどう異なるのか。またその異なりは、現状における“残存”の意味やその今後を考える上でどのような問題を示唆するのか。ここではそのあたりのことを、東北方言のいくつかの音声事象を例に、また音響分析による客観的な比較をもとに、検討していくこととしたい。

1. 調査・分析の概要

1.1 発音データ

まず最初に、ここでの考察は、標題の課題を見据えた統一的な調査が前提としてあるわけではなく、これまでの調査の経験からバリエーションの存在と意味に着眼し、それらから考察の糸口を探ろうと意図するものであることを断っておく。よって発音データは、2012～16年に実施した秋田県諸地点の音声調査より、^{注3} 主に60～80代の発音データを援用する形をとる。^{注4} 短期間である程度まとまったデータの採取があったこと、また結論的に上記でいうような多様なレベルでの残存が確認されたことなどが主な理由である。

1.2 対象とする音声事象

本稿では、まず母音面に対象を絞り、その中から次の3つをとりあげる。

- 1) /i/ と /e/ の混同
- 2) /si/ と /su/ の混同
- 3) /ai/ 連母音の融合

ここに1)～3)を対象とするのは、典型話者とそれ以外の話者との間で、上記に着眼するような差が少なからず確認されたことによる。加えて、近接する母音どうしの体系性の問題（舌の高低・前後）→1)・2)、連母

音融合のメカニズムの問題→3) というように、検討にあたり、音生成の仕組みとそれによる問題の所在が事象間で異なることを考慮した。

1.3 対象とする話者およびその分類の枠組み

先に述べたとおり、秋田県諸地点の音声調査より、以下に本論で設定する残存レベルの枠組みに応じて、主に60～80代の話者を事象ごとに選定し対象とする（よって1)～3)により対象とする話者や人数は異なる。またいずれも男女差は問わない）。^{注5} なお残存レベルの枠組みについては、目に見える回答状況の差に即して、次のように大別する。

- A. 典型レベル：求めると同時に方言音声が発音される話者（基本的にそうとしか発音できない話者）
- B. 中間レベル：誘導により求める方言音声が発音される話者（最終的に方言音声を回答するが、それに至る過程で共通語的な発音が回答される話者）
- C. 知識レベル：共通語発音が主体である話者（問題の方言音声を知っており、実際に発音もできるが、基本的に生活の場でそれを発音することがない話者）

上記のうち、Bの「中間レベル」は文字通りAとCの中間段階に位置する話者群であるが、詳細にはA寄りの性格が強いものから、どちらかといえばC的な要素が強いものなど、いくつかの段階差があることがみとめられる。^{注6} ただし、いずれも一度で求める方言音声に辿り着かない（まずは共通語的な発音が回答される）という点で、基本的に使い分けが可能な話者群であると解することができる。その意味では、実質「知識レベル」の一段階に相違なく、以後見る視点としては、大きくAとB・Cの差となることを考慮されたい。

2. /i/ と /e/ の混同

以下、「息」/iki/ と「駅」/eki/ のミニマルペアに基づき、各調音の接近具合をF1 - F2図上に対比しながら見ていく。F1 - F2図は、F1（第1フォルマント・縦軸：舌の高低に相当）とF2（第2フォルマント・横軸：舌の前後に相当）の交点によって示され、分析により得られた数値を縦横にプロットすることで各母音の調音位置が決まる仕組みとなっている。またそれらを結んでできる五角形はおおむね基本5母音のそれに相当し、これに基づくことにより、各母音の位置関係が視覚的に対比できる仕組みともなっている。その5母音のF1・F2値について、今石元久（1997）には、NHK男性アナウンサー12名、女性アナウンサー6名（いずれも1992年当時）の各平均値が記されている。これを図示すれば、

	男性アナ平均		女性アナ平均	
Vowel	F 1	F 2	F 1	F 2
/i/	284	2214	381	2866
/e/	450	2001	510	2509
/a/	792	1209	978	1384
/o/	431	650	567	894
/u/	315	1103	390	1274

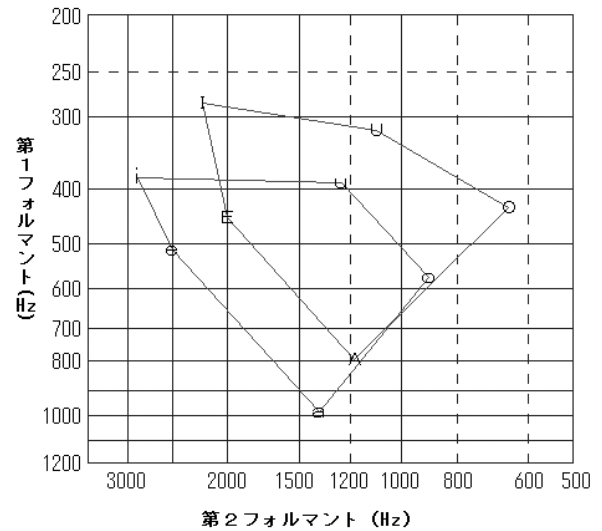


図1 日本語の標準的な母音体系 F - F 2 図

日本語の母音体系の「ものさし」は図1のように把握されることとなる（I～Uが男性，i～uが女性）。^{注7}

視覚的に明瞭なように，各母音のF1・F2値はともに男性よりも女性の方が高く，^{注8}五角形で表される「ものさし」は，全般に女性の場合において左下方向にシフトする形状のものとなっている。以下にはこれをもとに

各話者の調音位置を見比べていくが，その比較にあたっては，要するに男性の場合が図1におけるI～U，女性の場合がi～uが標準的な母音体系を測る目安となる（ただし次の図2以下では，記号の重複等で各調音が不分明になるため，I～Uとi～uは表示せず，それぞれ*に簡略化して示す）。

【F1 - F2図 凡例】

- ・「息」/iki/ と「駅」/eki/ の分析結果を左右に対照する（図2・図3）。
- ・ともに図1より母音体系の注目箇所を拡大して表示する。
- ・A：典型・B：中間・C：知識レベルの各話者を●・■・▲（男性）／○・□・△（女性）で表すとともに，それぞれに話者番号を付して個人を特定する（たとえば●1を図2と図3で対比することで，「A：典型話者1」の/i/と/e/の接近具合が確認される）。

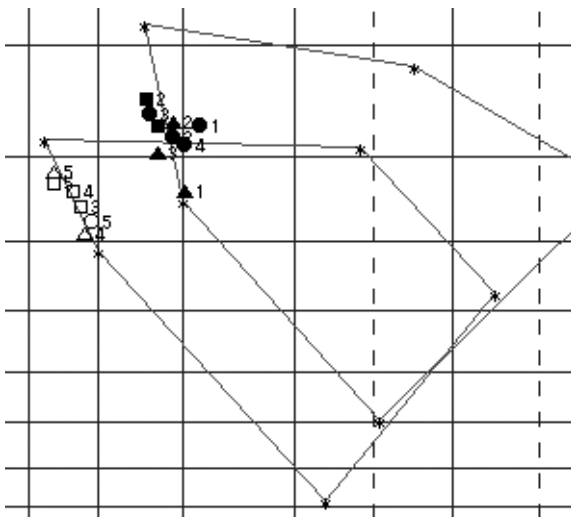


図2 「息」 /iki/

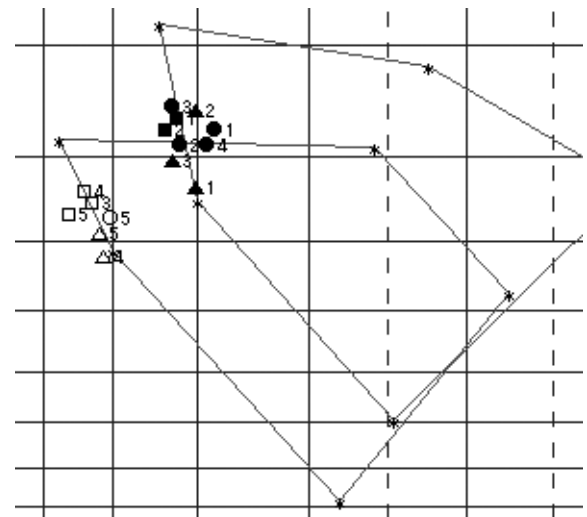


図3 「駅」 /eki/

これによれば，まずAの話者が，基本母音のイとエのちょうど中間あたりに密集しつつ，どちらかといえばやエ寄りの位置に現れる傾向にあることがうかがえ

る。^{注9}そして何よりも，各話者において，図2と図3とでほとんど差がないことが特徴である。これらにより，いわゆる典型話者の発音は，どのような発話のタイミン

グでも /i/ と /e/ は区別されず、ほぼ安定して中間音付近に現れる性質のものであることがわかる。

一方、Bの話者もおおよそ上記の実態に準じるが、細かく見ると、■2や□5など、図2と図3とで若干の差を見せるものがある。つまり「息」/iki/ が中間音よりはイ寄りの位置に、「駅」/eki/ がエ寄りの位置に現れるという差である。このことからすると、話者本人の内省こそ /i/ と /e/ は区別されない中間音であるが、実際には共通語音声との使い分けの背景もあり、現れる実相はAよりも混同の加減ないしはその安定性に欠ける面があることがうかがえる。

以上に対し、Cの話者は、全体としてはAやBの流れを汲む一方、個々の現れ方の部分でそれらとは質的に相違する面があるように見える。そのひとつが、特に図3の「駅」/eki/ において、(たとえば▲1や△4がそうであるが)、基本母音のエの位置にほぼ重なって現れるものが散見される点である。このうち、▲1に関しては、図2の「息」/iki/ でも同じくエに近く現れ、各頭母音がおおよそその相で合一化していることがわかる。他方、△4の場合、図2の「息」/iki/ はエよりは少し中間に寄った位置にあり、いわゆる合一化の段階にはないが、各頭母音が基本母音のエを軸に現れているという点では▲1と類似する性格のものと受け取れる。いずれにせよ、これらの実相に生じていることは、先のAやBの話者が志向するような、/i/ と /e/ が相互に接近し合って中間音付近で重なりといった性格のものとは異なる。それよりも、まずは /e/ がそれらしく実現されることに軸足が置かれつつ、その /e/ に /i/ の方がいかに接近して類似する関係を築くかが当実相の生成の要となっている。つまり、▲1や△4の話者がまさに“知っている”とする知識レベルの混同のひとつは、原理的にはより単純に、/i/ と /e/ がともに基本母音のエに近く発音される現象であったと受け止めることができる。なお例こそ少ないが、たとえば△5のように、話者自身は「/i/ と /e/ は混同する」旨を内省しながらも、実際には /i/ は基本母音のイに近く、/e/ はエに近く現れて明確に区別されるものもある。これなども、Cにおける残存の意味合いがAやBとは質的に異なることを印象づけるものであるといえる。

以上を総合するならば、/i/ と /e/ の混同に関しては、一口に“残存”と括られるものの中に、少なくともA～Cの段階に応じた質的バリエーションが抽出されることがうかがえる。つまり、ほぼ安定して /i/ と /e/ の中間音付近に現れ、合一化の様相が徹底するA、おおよそその実相は維持されながらも、混同の加減や安定性の面で欠けるところが見られるB、その実相が /e/ 方向へと移動するなど、混同の様相が変質しつつあるように見えるC、というバリエーションである。これらはすなわち、典型話者

における「そうとしか発音できない」レベルでの残存の実態が、中間・知識レベルを経て、混同の加減や方向、そしてその実相の生成原理をも変質していく過程の姿を物語っているといえる。

3. /si/ と /su/ の混同

まず /si/ と /su/ の混同に関して特徴的なのは、ここ数年の調査において、「発音が紛れる」、「混同する」といった内省の得られることが格段に少なくなったことである。その結果、Aの典型レベルが抽出しにくいのはもちろんのこと、さらにそれ以降の段階者になると、現れる実際音が必ずしも合一化の状況にはないものが見られることとなる。つまり当事象の残存の在りようは、それ自体、段階やレベルを超えて明確なものとは言いがたく、衰退の傾向が著しいことをまずは指摘しておく必要がある。したがって「注4」にも記したとおり、当事象の典型話者に関しては、本調査とは別に、一部2008年および2010年に実施の調査データを用いることとする。

以下には、上記のことを念頭に、「梨」/nasi/ と「茄子」/nasu/ のミニマルペアに基づき、各実相の位置関係をF1 - F2図上に対比して見ていく(図4・図5。なおA～Cの表示と話者の特定の仕方については、先の図2・図3の凡例に従う)。

これによれば、まずAの話者が、図4と図5とでほとんど差を示していないこと、また各図ともどちらかといえば基本母音のイの方に近く、かつ目安となる五角形からはかなり下方向に現れていることがわかる。特に○3などを見ると、F1は502Hz(図5)とほぼ半狭母音の /e/ の位置に迫る様相であり、この調音を特徴づける一大要素ともなっている。ちなみに聴覚的な印象をいえば、これらの発音に口蓋化の響きはあまり感じられない。また聞き耳にはシウともスイとも書き写される微妙な中舌音であるが、図の調音と同様、相対的にはややイがかった[nasi]のように聞こえる。秋田県は元来、北奥方言的なズーズー弁地域とされてきたが、^{注10} 典型話者の上記のような発音は、まさにそのことを象徴するものと考えられる。

次にBの諸相に目を向けてみると、先のAにみとめられたのと同様、イ寄りの半狭母音に現れるもの(■1)、それに準じてほぼ中間音付近に現れるもの(■2)がある一方、程度の差はあるが、むしろ /si/ はイ寄りに、/su/ はウ寄りに現れて区別されるもの(■3・□4)が併存することがわかる(ただし後述の比較とも関わるが、図5の□4をはじめいづれもF1値は高く、下方向に寄り気味な調音であることには注意がいる)。先にも述べたとおり、/si/ と /su/ の混同に関しては、近年、それを

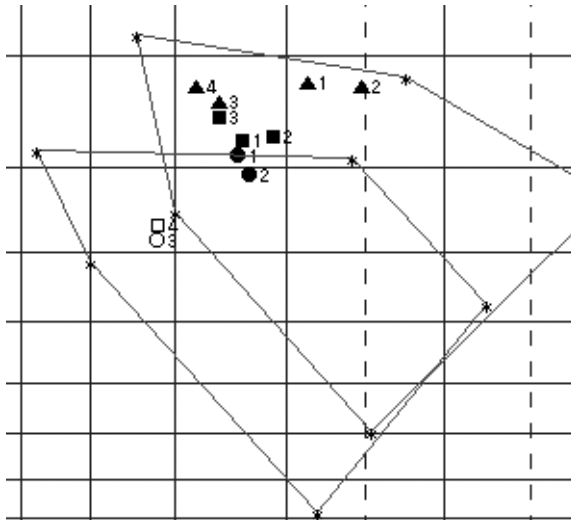


図4「梨」/nasi/

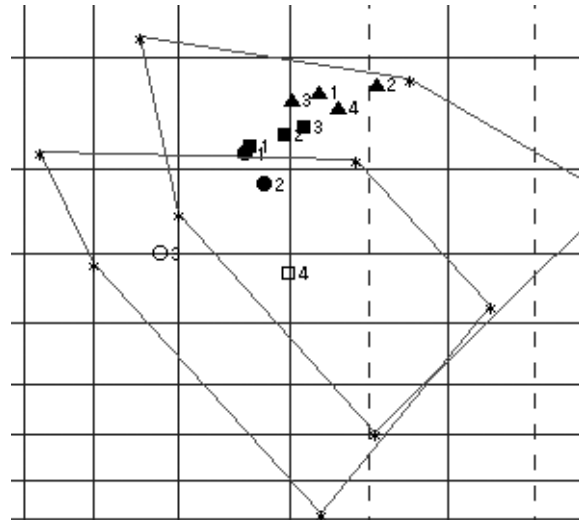


図5「茄子」/nasu/

自覚的に内省する話者自体が格段に減ってきている。それに連動してか、ここにBのレベルとみとめる話者たちも、実は誘導により混同の実態を安易に認識するというふうではなく、多くは自身の発音を振り返りつつ、「人の耳には似た発音に聞こえるかもしれない」といった内省に終始するものだった。つまりBの中間レベルでは、実相の面でも、それに対する音意識の面でも、安定して従来の実態が得られる状況にはなく、傾向としては広口の中舌音、また実質的には区別を有する調音となりがちであることがうかがえる。

以上に対し、Cの知識レベルでは、一見して先のAやBに見てきたものとは様相が異なる。その異なりのひとつは、各実相が一定箇所に偏らず、大きくは分散傾向にあることと関係する。それは直接的には個人差が大きいことを意味するが、ここで注意すべきことは、むしろその分散して現れる個々の実相の調音位置に関してである。まず第一に指摘されるのは、先のBと同様、/si/と/su/を明確に区別するものがあり(▲3・4)、当事象の衰退の動きが否めないことである。しかし一方、/si/と/su/がほぼ合一化して現れるものもあること、しかもそのひとつは中間音よりもややウ寄りに(▲1)、またひとつはそれよりもさらにウ寄りとなって現れ(▲2)、Aで典型的とみとめた「ややイがかった[nasĩ]」とは対極をなすことがなお一層注意される。つまりこの知識レベルでは、Bの段階に準じて/si/と/su/を区別するものがある一方、逆に合一化を徹底するものもあること、ただしその実相は従来のそれとは異なり、合一化の方向を違えて出来していることが何よりも注意されるのである。

なおそのことと関わって、ここに再度▲1～4を見通し、確認しておかなければならない重要なことがある。

それは、先のAとBにおいて、ともにこの調音の一大要素と指摘された「F1値が高く、舌が下方向に寄り気味」な特徴が、このCにおいてはさほど明確にはみとめられないことである。特にウ寄りの合一音に現れる▲1・2に関していえば、視覚的に中舌音が弱いことはもとより、縦軸上においても、●や■の分布群などからはるか上方に位置する狭母音である。とすると、これらの調音には、先の「/i/と/e/の混同」(Cの段階者)の場合にみとめられたのと同じように、単に基本母音近くのス(/i/と/e/の場合はエ)に代替して合一化するといった、発音の単純化原理が働いていることが考えられる。当該のCの話者は、「注1」にも記したとおり、現状が知識レベルにあるが故に、方言音声そのものへの理解や自覚は、むしろAの典型話者などよりも明確であることがうかがえる。またそうであるからこそ、Bの中間レベルがこぞって衰退の傾向を示す中、一部ではあるが、それに後行するCの話者が反転する形で合一化の実態を徹底するものと思われる。おそらくは、▲1や2の話者にとって、当事象に関して“知っている”とする知識の主体は「合一化」そのことだったのではないか(その点では、上記は目論見どおりの発音であり、主体として持つ知識が正しく遂行されたことになる)。しかしそれに伴うべき実相が、(Aの典型話者ですら微妙な中舌音であったことにもより)、図らずも実相違いのウ方向のものとして実現されることとなった。また当然、実体がそうした知識頼りの発音であるがために、舌を下方向に押しやり低母音化するといった生理的な調音は当人たちにおいて付随しがたかったのであろう。その結果、最も単純で実現可能な“基本母音のスに近づけそれに代替して調音する”ことが上記のようになされたものと推察される。とすれば、これは単なる実相の移動や変化を意味するにとどまら

ず、合一化原理の変質を伴う大きな動きであったと受け止めるべきかと思われる。

さて、以上を総合するならば、この /si/ と /su/ の混同に関しても、一口に「残存」と括られるものの中に、やはり A～C の段階に応じた質的バリエーションが抽出されることがうかがえる。つまり、ややイがかって半狭母音近くに合一化して現れる A、同じく半狭母音的ではあるが、/si/ と /su/ を区別するものが大勢となりつつある B、個人差が大きい中、対極であるウ方向に、しかも狭母音に合一化するものが生じつつある C、というバリエーションである。これらはすなわち、典型話者における北奥的なズーズー弁が、中間・知識レベルを経て非ズーズー弁化していく過程を、また人によっては「合一化」という知識の断片に依りつつ、実相の生成原理をも変質し、それを維持していく過程の姿を物語っているといえる。

4. /ai/ 連母音の融合

/ai/ 連母音に関しては、秋田方言において、まずは「融合しない」と内省する話者がほとんどいない。それは年

【凡例】

- ・ C の知識レベルに該当するのは 3 名（うち 1 名は調査時 47 歳男性）である故、それがそのまま分析対象となる。
- ・ 融合音 /eR/ の持続部において、その調音とみとめるのは、いずれもその末部である。
- ・ よって、たとえば [ea] や [æ] など、/eR/ の持続部で調音移動を伴う場合があるが、ここではいずれもその末部が分析対象となる。

これによれば、まず A の典型レベルでは、基本母音のエもしくはアに近く現れるものが図上の上・下限に位置し、その二者間を埋める形でそれ以外のものが分散して現れていることがわかる。つまり大局的に見れば、①エに近接するもの、②アに近接するもの、③その中間に位置するものの三様である。このうち②に当たるものは、他の 2 つと比べると、数的にそれほど多いというわけではない。②とは上述のように、融合音 /eR/ の持続部に調音移動が伴うタイプであるが、当方言ではすなわち、そうした融合過程の段階的な調音を呈する話者は比較的

配者に限らず、中・若年層といった若い世代でもほぼ同様のことがいえる。^{注11} したがって当事象の場合、先の「3」や「4」に関して少なからずみとめられた衰退の傾向が当てはまらないという点で、それらとは一線が画される。また同時に、/ai/ 連母音の融合は、単音節の /i/ や /e/ をそれ自体どう発音するのかとは違い、元々の連母音を意識的にどう操作し 1 音と化すかの現象であり、そこには自ずから知識レベルの要素、つまりは想定される発話の場やスタイル、またそれに伴って選択される発音意図のような側面が関わることとなる。よって当事象の場合、特に A と B の各レベルの差はその時々々の回答のタイミングによるところが大きく、^{注12} 実質的な差はそれほど大きいものではないと受け取れる。

以下にはこれらのことを念頭に、「高い」/takai/ の融合音を分析対象とし、各実相の位置関係を F1 - F2 図上に対比して見ていく（図6）。なお図の見方は既見の図2・図3の凡例と同じであるが、話者の選定、およびその各調音を特定するにあたっては、さらに以下の凡例のような手続きを踏む。

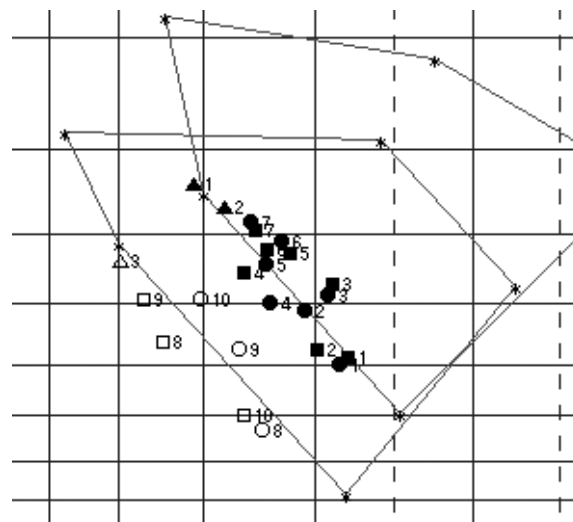


図6「高い」/takeR/

少ないことがうかがえる。^{注13} それに代わって大勢を占めるのが③の中間音である。またエに近接する①のタイプもその③の分散領域に接続する形で一定の勢力を有している。いずれにしても、A の段階者にあつては、融合音内部で調音変化する②のようなタイプはあまり現れず、縦軸上を分散しながらも、おおよそ安定して広口の [ɛ] ～ [e] となることがその特徴である。

次に B の中間レベルに目を移してみると、一見する限り、先の A との違いが明確にはみとめにくい。上記の①～③のタイプがともに確認しうることで、その中でも特に

③の中間音が大勢を占め、それに接続して①の諸相も一定の勢力を有することなど、Aで指摘された事項の多くがそのままこのBにおいてもなぞらえられる。細かいところでは、■1・2や□10など、Aに近接して現れる②のタイプがやや優勢の観もあるが、Aの状況と段階を分かťほどの差とも見なされない。既述のとおり、AとBの差は、実質的な調音の差に由来するというよりは、その時々の回答レベルでの差に付随するものと理解するのが妥当である。よってこのBの段階者にあつても、おおよそAの段階者にみとめられたのと同様、分散しながらも安定して広口の [e̞] ~ [e] に現れる状況が抽出されるものと見なされる。

以上に対し、Cの知識レベルとなると、一転してそれらとは様相が異なる。その異なりは、結論としては当該の話者すべてが基本母音のエにほぼ重なつて現れ、AやBに特徴的であつた広母音寄りの実態が皆無に等しいことに尽きる。中でも▲1などは、目安となる図上のe(つまりは基本母音のエ)よりも少し上方向にあり、AやBが志向するような調音とは性格を分かťことをことさらに強く印象づける。これらは、既に大橋(2003)(2016)などでも繰り返し言及してきたように、おそらくは、AやBのレベルが「ai連母音部におけるaとiとの相互干渉、あるいはその両音のせめぎ合いとでも言うべき力学関係が強く働いている」(大橋2003:p.126)調音と考えられるのに対し、Cのレベルが「連母音部にもともと当人が体系として有していた音をあてただけの[e]」(大橋2016:p.20)に現れ、その調音が「固定・習慣化している状況」(大橋2003:p.126)と見なされることによるのであろう。つまり当事象に関しても、単に結果音に関してのみならず、その生成原理の側面で既に実態を異にする段階のあることが、(上述のように、当事象が元々の連母音を意識的にどう操作するかの現象であるが故に)、より明確に確認されるのだと思われる。

以上を総合するならば、この/ai/連母音の融合に関しては、典型と中間レベルでの差こそ明確ではないながら、それらと知識レベルとの差において、より大きな質的バリエーションが抽出されうることがうかがえる。つまり、元々のai連母音がなお活発に作用し合い、両母音の中間付近に現れることを基本とするA・B、もはやそうした母音干渉や相互同化の過程上には存在せず、専ら代替音の[e]に現れることを基本とするC、というバリエーションである。これらはすなわち、典型・中間段階における不安定な[e̞] ~ [e]の諸相が、基本母音相当の[e]に置き換えられることで体系中の1音となり、知識段階に向けて、それがさらに定着・安定化していく過程の姿を物語っているといえる。

5. 各音声事象の残存の実態とその言語動態上の意味

以上には、まず筆者による調査の経験から、音声実態に多様な回答状況のあることを確認し、従来、あまり顧みられることのなかつたその多様性が、同じく“残存”とみとめられる方言音声の質にどういった意味や影響をもたらしているのかを考察した。具体的には、各話者の回答状況に即して、A:典型・B:中間・C:知識という3つの残存レベルを設定し、その枠組みに照らしながら、1) /i/ と /e/ の混同、2) /si/ と /su/ の混同、3) /ai/ 連母音の融合に関する現状の把握を試みた。その各々に関して明らかになったことは次の点である。

- 1) 一口に“残存”と括られるものの中に、少なくともA~Cの段階に応じた質的バリエーションが抽出される。つまり/i/と/e/がその中間付近に合一化して現れるA、そのAに比べ合一化の加減や安定性の面で欠けるところが見られるB、基本母音のエにほぼ重なつて合一化するものが散見されるC、というバリエーションである。以上からは、典型レベルでの合一化の実態が、安定性を欠く中間レベルを経験し、知識レベルに至り再び合一音(ただし典型レベルとは異なり、基本母音のエに寄せて合一化するという単純化原理に基づくそれ)へと回帰していく動きを読み取ることができる。
- 2) 1)と同じく、A~Cの段階に応じた質的バリエーションが抽出される。つまり非口蓋化しながらも、/si/と/su/がいずれもややイがかつて半狭母音近くに合一化して現れるA、同じく半狭母音的ではあるが、合一化そのものは衰退する傾向にあるB、そのBに準じるものがある一方、むしろAとは対極のウ方向に、しかも狭母音に合一化するものが生じつつあるC、というバリエーションである。以上からは、典型レベルでの北奥的なズーザー弁が、主に中間レベルで非ズーザー弁化し、知識レベルでそれが徹底していく動きを、また人によっては知識の断片に依りつつ、実相の生成原理を変質し、むしろ合一化自体は維持しようとする動きを読み取ることができる。
- 3) これに関しては、A・BとCとの間に、それに応じた質的バリエーションが抽出される。つまり、ai連母音の相互同化により融合音がその中間付近に現れるA・B、もはやそうした同化原理にはよらず、基本母音のエに寄つた位置に単純化して現れるC、というバリエーションである。以上からは、[e̞] ~ [e]といった典型・中間レベルでの不安定な融合音が、知識レベルで体系中の[e]に代替することで単純化し、以後その相で定着・安定化していく動きを読み取ることができる。

これらに見てとれるように、1)～3)の3事象においては、いずれも回答状況の差に応じた方言音声の質的バリエーションがみとめられる。そこに共通するのは、典型的Aにおける残存が、それを維持するか衰退するかするBの段階を経て、疑似的ながら再びCにおいて方言色を強めていく動きを呈していることである。しかもここでの「疑似的」の実態も、旧来の母音干渉や相互作用（あるいは相互接近）の原理には基づかず、体系内の基本母音近くに類音を求め、それに代替することで単純化を図ろうとしている点で3事象に共通する。「注1」にも記したとおり、知識レベルのCの話者は、文字通り方言音声を知識として自覚するがために、一旦衰退するかに見えた中間レベルのBを差し置いてでも、Cで再び方言色を強めることが上記のようにみとめられるものと思われる。ただしここで注意されるのが、その実際音がともに疑似的であること、かつその音生成がいずれも代替音による単純化原理を基調としていることである。つまり方言音声の残存の在りようとして、もはや旧来のそれとは似つかわないほどに、残存の質が相違している点を注視しなければならない。従来、こうした残存レベルの差については、特に音声調査の場合、当該音を引き出す過程に多様なやり取りが想定される（それにより多様な回答状況のあることが想定される）背景もあり、どちらかといえば関心の外に置かれがちだった。しかしそのこと自体に着眼し、実相等との相関を細見するならば、やはり段階やレベル相応の質的バリエーションが抽出されうというのが、本論における分析結果の骨子ということになる。なお以上のことは、これ以降、方言音声の変化を追跡的に見ようとした場合、新しく残存レベルや質的バリエーションの観点が射程に入ること、その実像がより明確化する可能性も示唆する。いずれどの音声事象を対象とするにしても、知識レベルのCのような話者は存在するものと思われる、それらには多かれ少なかれ、旧来の方言音声とは異質の、つまりより単純化した調音に基づく「疑似的」実相の現れることが推測される。要は、それらを内的変化の過程上の諸音などとは見紛わないことである。ここでの考察は、そうした側面への気づきや着眼、また実際にその事実に即して実態を見ることの意味を確認できたという点で意義を有するものと思われる。

本稿は、先に「考察の糸口を探ろうと意図する」と記したように、これまでの調査データを援用し、着想の課題に大括りにでも見通しを立てることに主眼を置いた。したがって、ある特定地点を深く統一的に見通す視点には立っていない。その地点内を、高・中・若年層といった世代差の観点から見比べる視点にも立っていない。また本論では、上記のような意図により、確実に差のみとめられる母音の3事象について実態を見たが、今後はこ

れらと対比させつつ、母音ないし子音の他事象についても同様の関心が向けられてよい。いずれも本稿での究明点をもとに、また残存の諸相を迎える現状においてこそ展望される、発展的な課題である。

【注】

1. しかしこれらの話者においては、回答が自覚的である分、方言音声そのものへの理解や知識は、むしろ純粋な方言話者以上に明確であることがうかがえる。
2. このような検討に際しては、本来であれば特定地点を定め、多人数ないしは年代比較的な調査に基づくことが望ましい。しかし後述するように、本稿では既調査の発音データを援用しつつ、また地点や対象者にも特段の縛りを設けず、従来あまり顧みられることのなかった「残存のありようと実相との関わり」に探りを入れようとする。その点で予備考察的であり、文脈にあえて「ささやかながら」と付け加える所以でもある。
3. 秋田市9地点、能代市・大仙市・仙北市各2地点、山本郡三種町・鹿角市・北秋田市・大館市・男鹿市・湯沢市・由利本荘市各1地点、計22地点を対象とする。なお話者の年齢は、いずれも調査時点で47～89歳である。
4. ただし典型話者の残存の実相を抽出するために、一部、2008年および2010年に実施した調査の発音データを用いる場合がある。
5. 話者は、以下に用いるF1-F2図上で個人が特定できるよう、各事象で数名を選定し対象とする。なおその選定は基本的には無作為に行うが、その残存レベルの話者がそれ以外に該当しないなどの事情を有する場合はその限りではない。
6. たとえば、調査時の第一声が共通語音声の話者であっても、調査外の会話ではごく自然に方言音声聞かれることがある。これなどは、定義上はBの中間レベルであるが、どちらかといえばA寄りの性格が強い話者といえる。一方、誘導の結果方言音声を内省し、実際にそのように発音するものの、会話の中には一向にそれが現れないということもある。これなどは、同じくBの中間レベルであるが、逆にC的な要素が強い話者とみとめられる。
7. 今石元久ほか（1984）では、「現代日本語に標準語音を定めることは困難であるが、…「ものさし」的な言語を明らかにしておく必要があった」（p.88）とし、議論の末、「NHKアナウンサーの音声を「標準語音」と仮称する」（p.88）ことが定義されている。
8. これについては、藤崎博也ほか（1977）に「成人の女性では一般にこの表の値（筆者注、東京方言成人男性6名のフォルマント周波数平均値）よりも10-20%高い値となり、子供ではさらに高い値を示す」（p.73）、また今石元久ほか（1984）には「声道の長い成人男性のフォルマント周波数は低く、逆に短い子供等での周波数は高く現れる」（p.88）などとある。
9. 今石元久（1982）では、秋田県男鹿市の男性2名（1981年調査時点、64歳、67歳）の発音が音響分析され、/i/と/e/のF1値がともに330Hz前後であること、つまりその合一音は東京方言のiに近寄っており、[e̞]と記され

るべきことが論じられている。一方、図2・図3では、Aの典型話者の一例として男鹿市の実態をプロットしているが(●3), これによれば, /i/ と /e/ とともに 380Hz 近辺にあり, どちらかといえばエ寄りであることが特徴である。その点では, (今石 1982 の対象者とは世代差のあることにもよるであろうが), 典型話者の間にも中間音を軸にある程度の上下幅がみとめられることがうかがえる。

10. 柴田武(1962)では, 岩手県中部に非ズーズー弁地域があり, その北部に /su/ /cu/ /zu/ を欠くズーズー弁, 南部に /si/ /ci/ /zi/ を欠くズーズー弁が分布すること, このうち前者を北奥的なズーズー弁, 後者を南奥方言的なズーズー弁と呼び, 区別することが述べられている。また秋田県教育委員会編(2000)では, 「シ」(といっても, その音は「シ」と「ス」の中間よりやや「シ」に近い曖昧な音である)の地域が北奥, 「ス」の地域が南奥に大体含まれる」(p.8)とした上で, 秋田方言では「合一化する傾向が強い。その実相は, イのややウがかった [-i] である」(p.37)ことが述べられている。
11. 秋田方言の若年層の実態については, 大橋純一(2013)に詳しい報告がある。
12. たとえばBのレベルでも, 一旦 [tagaɛ] と回答した直後に, 誘導を待たずして [tagɛ] を回答する話者がいる。これなどは, 回答のタイミングによってはAのレベルとみとめられるものであり, 実態に大差はないものと受け取れる。
13. ただし, たとえば「苗」/nae/ などの /ae/ 連母音を例にとると, 比較的高い頻度で [ɛa] や [æ] の融合音が聞かれることがある。よってここで述べる傾向に関しては, その語が持つ性格や連母音構造によっても違いのあることが考慮される。

【文献】

- 秋田県教育委員会編(2000)『秋田のことば』無明舎出版
 今石元久(1982)「方言母音のホルマントー秋田県男鹿市の発音などに依拠してー」『国語学』128
 今石元久ほか(1984)『日本語方言音声のスペクトル分析資料』文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集
 今石元久(1997)『日本語音声の実験的研究』和泉書店
 上野善道ほか(1989)「音韻総覧」『日本方言大辞典 下巻』小学館
 大橋純一(2000)「北奥方言・南奥方言接触地域における /si/ /su/ ・ /ci/ /cu/ ・ /zi/ /zu/」『国語学研究』39
 大橋純一(2002)『東北方言音声の研究』おうふう
 大橋純一(2003)「音韻」『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
 大橋純一(2007)「言語接触地域における /-i/ /-u/ の実相と分布ー新潟県北部方言の場合ー」『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
 大橋純一(2012)「音韻」『宮城県・岩手県三陸地方域方言の研究』東北大学国語学研究室
 大橋純一(2013)「秋田県方言の特徴的アクセントおよび音韻に関する調査報告ー若年層の動態と意識ー」『秋田大学教育文化学部研究紀要人文・社会科学』第68集
 大橋純一(2016)「方言音声調査の記述報告ー宮城県白石市ー」『秋田大学教育文化学部研究紀要人文・社会科学』第71集
 佐藤稔(1982)「秋田県の方言」飯豊毅一ほか編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
 柴田武(1962a)「ズーズー弁でない東北方言」『国語学研究』1
 柴田武(1962b)「岩手県岩泉町付近の非ズーズー弁」『国語学研究』2
 藤崎博也・杉藤美代子(1977)「音声の物理的性質」『岩波講座 日本語5 音韻』岩波書店